

果樹

モモの硬核期と生理的落果

硬核期とは、モモの核（種）が硬くなる時期で、白色の核が急激に木化してきます。平年であれば県南地域で5月末～6月初旬に硬核が始まります。清水白桃では満開日から数えて51日後頃から硬核期に入ります。

生理的落果とは、核が硬くなる時期（硬核期）に果実が急に大きくなると核割れすることがあり、この核割れによって核の内側にある胚への通道組織が損傷すると、果実の発育が停止し生理的落果すると考えられています。

生理的落果は清水白桃や白麗などの品種で発生しやすいが、これらの品種は、生理的落果が収まった後に最終果実数に摘果を行い袋掛けをしています。

生理的落果の多い白麗では、満開60～70日後頃に一齐に落ちる傾向があります。予備摘果で最終着果量の2.2～2.5倍を着果させておいて、生理的落果が収まった70日後頃に仕上げ摘果を行います。

清水白桃では、白麗よりやや遅れて、満開65日～80日後頃と長く生理的落果が見られますので、落果の落ち着いてきた満開75日～80日後頃に修正摘果を行っていきましょう。

●修正摘果

生理的落果がほぼ終息したら、最終の果実数に調整をしていきます。この時に、樹上でシワを生じ黄味を帯びた果実（図1）やゼリー状の樹脂（ヤニ）が吹き出した果実は、落果していても核割れしていたり、変形果の原因になるので優先して摘果していきます。最終の果実数は1㎡当たり

水稲

水稲栽培における中期の雑草対策といもち病対策について

このアグリアドバイスが皆さんのお手元に届く時期は、田植がやっと終わり、一息ついた頃と思います。

その時期に雑草対策とは、ちょっと気が早いかもしれませんが、転ばぬ先の杖ということで、中期の除草剤について述べたいと思います。

まず、中期除草剤とは、田植後15日から20日頃に使用する除草剤のことです。

層では、初期除草剤で、ダツシユワンフロアブルとサンパンチ1キロ粒剤の体系処理をあげています。

したがって、初中期一発除草剤が、効果を發揮していれば、ほとんど雑草は問題になりません。

しかしながら、薬剤散布直後の大雨や、灌水状態が保てず地面が露出するなどの理由で、十分な効果が得られず、雑草の発生を確認した場合は、下表にある除草剤を散布して防除を行います。

この表の中のアトカラSジャンボは、中期のジャンボ剤として開発されたもので、1キロ粒剤では散布しにくいであるとか、液剤も散布が困難な方でも、小さい田であれば中に入ることなく畦から投入できるので、短時間で簡単に散布できる薬剤です。

昨年の試験では、コナギの発生が多い田で使用しましたが、ほとんどのコナギが枯れました。雑草をそのままにしておく繁殖して、収量に悪影響

表 中期除草剤

薬剤名	使用時期	使用量(10a当り)	使用方法・効果
●ヒエの場合			
クリンチャー1キロ粒剤	移植後7日～ノビエ4葉期(収穫30日前まで)	1.0kg	・湛水で散布(漏水田では使用しない)
	移植後25日～ノビエ5葉期(収穫30日前まで)	1.5kg	・湛水で散布(漏水田では使用しない)
クリンチャーEW	移植後20日～ノビエ6葉期(収穫30日前まで)	100ml 希釈水量 25～100ℓ	・湛水又は落水散布(展着剤使用)
●広葉雑草の場合			
バサグラン粒剤	移植後15～55日(収穫60日前まで)	3～4kg	・落水またはごく浅水で散布 ・散布後3日間は入水しない
バサグラン液剤	移植後15～55日(収穫50日前まで)	500～700ml 希釈水量 70～100ℓ	・同上 ・高温時は夕方に散布
●ヒエも広葉雑草も多い場合			
サンパンチ1キロ粒剤	移植後15日～ノビエ3.5葉期(収穫60日前まで)	1kg	・湛水散布
アトカラSジャンボMX	移植後20日～ノビエ3.5葉期(収穫45日前まで)	20個(500g)	・深水で、小包装(パック)のまま投げ入れる
ワイドアタックSC	移植後20日(イネ6葉以降)～ノビエ5葉期(収穫30日前まで)	100ml 希釈水量 100ℓ	・落水して散布 ・散布後落水状態を2日間維持
クリンチャーバスME液剤	移植後15日～ノビエ5葉期(収穫50日前まで)	1000ml 希釈水量 70～100ℓ	・落水またはごく浅水で散布

響を及ぼします。また、夏季の暑い時期に草取りは大変です。出来るだけ、早い時期に除草剤等を利用して、雑草の種を落とさないようにしましょう。長い目でみれば、この除草剤の費用も結果的に安い費用となると思われます。

●枝つり、枝支え

硬核期が終わると、果実が再び肥大していきま

16果が目安です。日当たりがよく樹冠上部の新梢がよく伸びる部分にはしっかりと着果させ、下部の日当たりの悪い部分では着果を少な目にしていきましょう(図2)。

図2 清水白桃の修正摘果の目安

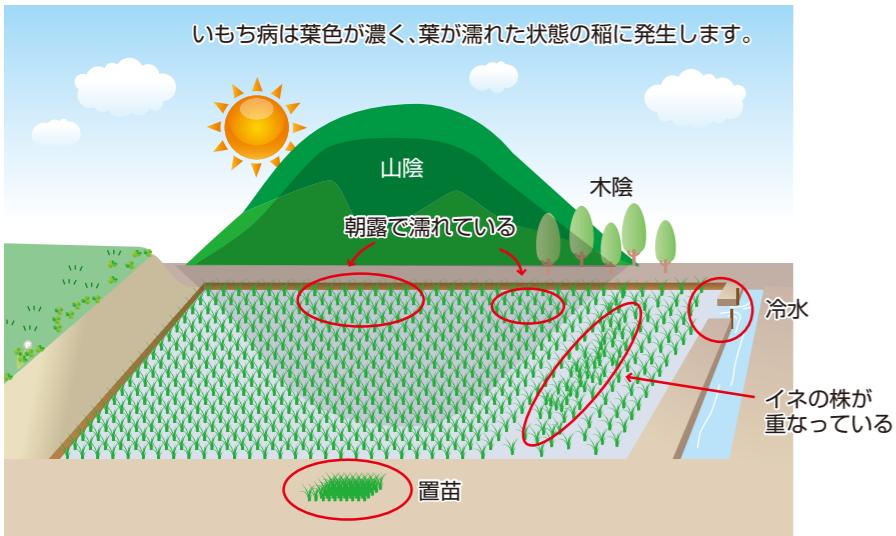
部 位	摘果の目安(1果当たりの葉数)
樹冠先端部や上部等の日当たりの良い部位	60～70葉
樹冠中間部等の日当たりの比較的良い部位	80葉
樹冠下部や裾枝等の日当たりの悪い部位	100～120葉

図1



図 一もち病が発生しやすい場所

一もち病は葉色が濃く、葉が濡れた状態の稲に発生します。



岡山県南部地帯では発生が少ないですが、地域によっては、毎年、葉一もち病が発生しています。その主な原因は、右図に示すような場所で発生しています。人為的に発生を抑えるには、置き苗をしないことです。葉一もち病が発生して、葉のほとんどが枯れてしまう(ズリ込みいもち病)状態であれば、ブラシン剤等で防除しましょう。また、葉一もち病の発生が軽微でも穂一もち病の原因になりますので、出穂前の防除は必行です。

(営農部 酒井 啓)

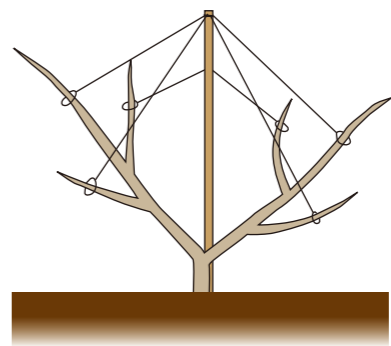
いもち病対策

●灌水等水分管理

乾燥傾向から一度に多量の降雨があると、核割れ、変形果、生理的落果を助長します。軽減させるためには土壌水分の変動を少なくすることが重要です。硬核期にあたる6月は土壌水分の急激な変化を避けるため、5日程度降雨がない場合には、必ず灌水を行うようにしましょう。また、モモは耐水性が弱いので、排水不良の園地では樹勢の低下、収量や果実品質の低下がみられます。多量に降雨があった時は停滞水の確認を行い雨水が溜まっている場合には明渠を作り停滞水が園外に流れ出るようにしましょう。

(営農部 高谷 昌義)

図3 主枝、垂主枝の立て直し



が下がっていきませんが、先端が極端に下がってしまふと日当たりが悪くなり果実品質が低下するばかりでなく、樹冠の中央部から徒長枝が立ちやすくなつて樹形が乱れます。またひどい場合には先端部が折れてしまつたり、大きな側枝が折れて果実を失うこともあります。主枝、垂主枝などの大枝は、樹冠中央に立てた吊り支柱から誘引線などで引き上げるか、下から支柱などで支えて、日当たりの維持や枝が折れないようにしましょう。下から支える場合、風で支柱が外れないように枝と支柱を固定しておきましょう(図3)。